説教20210103　ルカ2:41-52 121 122 234A

「仕えて、愛される」

皆さん、クリスマスそして新年おめでとうございます。父なる神が私たちに御子イエスキリストを与え、私たちの内に住まわせてくださったことに、心より感謝と賛美を捧げます。

　今日の聖書箇所に記されています通り、御子イエスキリストは、ナザレにおいてこの世の家庭生活を人々とともにされました。その生活は、主イエスがヨハネから洗礼を受ける３０歳くらいまで続きました。今日の箇所はその家庭生活の様子が記されております数少ない貴重な箇所であります。

　「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された」とこの箇所は締めくくられますが、これはこの一幕を締めくくるにふさわしい特徴的な聖句のように思われます。「イエスは、神と人とに愛された」めでたしめでたし、で聖書全体が終わるわけではありませんが、イエス様が両親や家族との家庭生活をやり終えたことの幕引きとしては大変ふさわしく特徴的な言葉だと思うのです。

　殊に、「イエスは、人に愛された」とはっきりと記されているのは聖書中ここくらいなのではないでしょうか。ご存じの通り洗礼を受けてから後のイエス様の旅路は、苦難と迫害を受ける道のりでしたし、決して人から愛された、と言えるような旅路ではありませんでした。その旅路は人々に裏切られて見捨てられて、十字架の死へと向かう道で在りましたし、言うならば、人から愛されなかったという事であります。しかし、イエス様はそんな私たち人間を「愛して、この上なく愛し抜かれた」のであります。

　とても人間的な見方をすれば、イエス様は、将来このように、愛されない人を愛することが出来るように、その少年青年時代に、努めて人から愛されるように、人々の中で人々に仕えて生活をされたのではないでしょうか。真の人であるイエスキリストはその少年青年時代に人々との生活の間で、仕え愛されることを習い覚え、私たち人間と同じように、人として成長されたと、それは言い換えられるでしょう。

　今日の聖書箇所は、真の人であるイエス様の人間的成長が記されている数少ない貴重な聖書箇所なのです。

　さて、先週これは聖書中最も重要な聖句であると言ってお話ししました、ヨハネ福音書一章14節の「言葉は肉となって、私たちの間に宿られた」という聖句を、ここで思い起こしましょう。皆さん、この聖句の滋味を味わうことはこの一週間で深められたでしょうか。この言葉の味わいを深めていくにはたとえば「みことばは～人となり～私たちの～間に宿られた」という風に節をつけていつも口ずさむこともよいかもしれません。

　この聖句はちょっとギリシャ哲学的に表明されていますので、その意味を考え出すと、頭が痛くなってしまうかもしれませんので、歌にして歌って慣れ親しんでいくことはとても効果的です。そして幸いなことに、今日の聖書箇所では、み言葉であるイエス様が人となって私たち人間の中で家庭生活をされたことが記されておりますので、今日の聖書箇所を読めば、「言葉は肉となって、私たちの間に宿られた」ことの味わいが鮮明にされてくることでしょう。ただし、イエス様とその両親ヨセフとマリアの生活は、そんなに具体的に記されてはおりません。イエスは、大工であったヨセフについてその大工仕事を習い覚え、二人はナザレの村の人々の住まいをあちこち建てて回った、イエスとヨセフは人々から愛された、というような具体的な記述はなく、多くのことは私たちの想像や黙想に委ねられています。私たちは、今日の聖書箇所から、少年青年イエスが人としてどんなであったか、人ととしてどのように成長していったか、その姿を大いに膨らましていくことが出来るでしょう。

　真の人としてのイエスキリストの姿は、大変私たち人間に親しみやすいものです。先日大みそかの日に紅白歌合戦を聞いておりますと、トリで福山雅治さんが「家族になろうよ」を歌われました。「あなたとなら生きて行ける幸せになろうよ」とこの歌は締めくくられますが、世の人々にはこういう人間愛の歌は広く受け入れられていきます。

　今日の聖書箇所に限って言えば、このような人間的なヒューマニスティックな語りと聖書は親和性があることでしょう。もちろん聖書はそれだけではありませんが。

　しかし、私たちは、イエス様がナザレでの人間的な家庭生活を全うされて、最後に「背丈も伸び、神と人とに愛された」という、その時に与えられたご自分の人間としての役割を十分に果たし終えられたことに思いを致したいと思います。

　さて、これまで、今日の聖書箇所を真の人であるイエスキリストの面に焦点を当てて語ってまいりましたが、他の面である、真の神としてのイエスキリストの姿も又、今日の聖書箇所にはっきりと浮かび上がっています。もし真の神としてのイエスキリストの姿がないなら、それはただのヒューマニズムを説く宗教と変わらないのです。

　神のことを語るにはまず、４１節の、両親は過ぎ越し祭には毎年エルサレムへ旅をした、ということを語らねばなりません。この巡礼の旅は、当時のイスラエルの家の人たちにとっての慣習でありました。この42節に見える慣習という言葉は大変重い言葉で元のギリシャ語ではエトスと申します。当時のイスラエルの人たちが、どれほどこの巡礼の慣習に縛られ、又寄り頼み、又それに救いを求めていたのかは、その慣習を持たない今の私たちには測りがたいことです。分かりやすく例えれば、今のエルサレムにあります「嘆きの壁」に赴いて、その場にこそ救いを見出して、その壁にすがりつつ涙を流すユダヤ人たちの心境を、今の私たちは容易に推し量ることはできないでしょう。

　イエスの両親たちは、その巡礼の慣習に従って、１２歳になって巡礼に参加する資格を得た少年イエスもつれて、巡礼の旅に出たのであります。その旅の心境がどのようであったのかは、詩篇120篇から134編に記されます「都に上る歌」を読めばわかってきます。この都に上る歌は、実際ダビデがエルサレムにのぼる途上で歌った歌とされています。印象的な箇所をご紹介しますと122編1節から、「主の家に行こう、と人々が言ったとき／わたしはうれしかった。エルサレムよ、あなたの城門の中に／わたしたちの足は立っている。エルサレム、都として建てられた町。そこに、すべては結び合い、そこに、すべての部族、主の部族は上って来る。」ですとか、128篇、「いかに幸いなことか／主を畏れ、主の道に歩む人よ。あなたの手が労して得たものはすべて／あなたの食べ物となる。あなたはいかに幸いなことか／いかに恵まれていることか。妻は家の奥にいて、豊かな房をつけるぶどうの木。食卓を囲む子らは、オリーブの若木。」というように歌われています。

ヨセフもマリアもイスラエルの家の一員として、ダビデと同じようにエルサレムへのぼっていったのです。この詩編を味わいますと、ヨセフ、マリアそしてイエスという小さな家族は、より大きなイスラエルの家につながるため、その喜びに満たされるために、過ぎ越し祭が行われているエルサレムへとのぼっていったのでありましょう。「エルサレム、都として建てられた町。そこに、すべては結び合い、」と詩篇は歌いますが、このようにすべてを結びあい一つにされるのは、主なる父なる神です。父なる私たちの神はどこにおられるのか、それをエルサレムの神殿に尋ね求める巡礼が、当時のイスラエルの家の人たちの慣習で在りました。

　ところが、ヨセフとマリアは、エルサレムの神殿の真ん中に残っていたイエスを見失い、イエスを探し回って三日間を過ごしたのであります。この時マリアが少年イエスに再会した時のものの言いよう「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」から推し量りますに、この家族は生活を積み重ねて行く中で、何か人間的な思いに満たされた、馴れ馴れしさを醸し出していたかもしれません。

　私事で恐縮ですが、私も小学生の頃、家族で京都の町のお祭りに出かけたとき、ほんの数分間のことだったと思いますが、人ごみの中で、私たち5人家族がそれぞれを見失い、人に紛れてさまよったことを思い出します。それからすぐに全員再会できて、お店で共に食事をしたのを覚えていますが、その時、お互い様なのになんだか親から子供たちが一方的に責められたような記憶があります。人間とはそんなものだと思います。

　マリヤの「なぜこんなことをしてくれたのです。」という物言いにもそのような人間臭さが満ちているように思います。しかしそのような人間臭さの中にこそ、真の神としてのイエス様の言葉が返されたのでした。49節「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」というイエス様の言葉は人間的に考えれば、なんか逆に的を外したような不得要領のお答えに思われたかもしれません。その思いが、「しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった、」と50節に記されています。このように人々の質問にストレートには答えられない問答を主イエスは、その十字架への道行においてよくなされていくことを皆さんご存じかと思います。

　このように人と神の間で自ずとかみ合わない問答というのは、私たちを人間の限界を超えた神の領域へと導くきっかけになることでしょう。私たちは今日の或る意味人間臭い聖書箇所にこのように立ち現れた、主イエスの神の言葉を深く味わいたいと願います。この「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」という主イエスのお答えを、マリアは心に収めたことでありましょう。なぜなら貞潔なマリアにはよく思い起こせば、身をもって思い当たるふしが確かにあったからです。マリアはその身をもって神の子が自分の胎に宿ったことを知っていましたから、マリアは、「言葉は肉となって、私たちの間に宿られた」ことの滋味をその体で深く味わうことが出来たでありましょう。

　私たちは、十字架にかかられて新で復活され、今は目には見えないけれど私たちを導き共に歩んでくださる主イエスにすべてを委ねて、日々生活をしています。私たちのそれぞれの家庭の生活にも主イエスはおられるのです。そして今やエルサレムの神殿はありませんが、この教会こそ主イエスの体であります。私たちは共に、その言葉が私たちの間に宿られているその滋味を、最後まで心と体で味わってまいりたいと願います。

祈ります

天の父なる神よ

あなたは御子イエスキリストをこの地に送って下さり、家庭での生活を通して、私たちと同じ愛される人とされました。どうか私たちもその模範に習いこの世にあって人として成長していくことが出来ますように。

又同時にあなたは、み言葉によってあなたの限りない愛と平和とを示してくださいます。どうか新しいエルサレムを待ち望む私たちが、心を高く上げ、神と人とを愛する者となることが出来ますように。

今、新しい年を与えられ、私たちは降誕節、受難節を主イエスと共に歩みながら、イースターへと導かれています。どうか、これからの月日を聖書とともに、どこに居ましてお臆することなく、あなたの祝福の内に歩んでいくことが出来ますように。

年の初めを病院で迎えられた方々、又施設で暮らしておられる方々と面会がかなわないという困難な状況の中で、私たちが心を一つにし、同じ思いと言葉をもって一致し、あなたの平和の内に居ることが出来ますように。

多くの困難、苦難の中でこの年が始まりましたが、その中で私たちはあなたの光に導かれ平和を頂いています。私たちもその光を隣人に輝かせていくことが出来ますよう、私たちに必要な力、知恵、熱意をお恵み下さい。

父と聖霊とともに